
カモメ

edge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

力モメ

【Zコード】

N6402C

【作者名】

edge

【あらすじ】

1969年7月、アポロ11号による人類はじめての月面着陸が成功し、紙面やニュースを賑わせていた。しかし、僕らにはそれよりも大切な毎日を生きる必要があった。彼女はいざれ死ぬかもしれない病魔に冒されていた、、、

なま乾きの”かさぶた”をはがすような毎日だ。

じくじくした痛み。

僕は永遠とその痛みと共に生きていこうだらう、。

1969年7月、僕は病室で彼女とテレビをただ、ボンヤリと眺めていた。

アポロ11号が月面へ降り立ったニュースが連日テレビをにぎわせていた。

「ひとりの人間にとつては小さな一步だが、人類にとつては大きな飛躍だ」

人類ではじめて月面へ降り立ったニュース・アームストロングの一言がいつまでも耳に残っていた。

「人間が月へ行けるのに、君の病気は何で治せないんだろうね？」

現代医学の全てを注ぎこめば彼女の病気は治るんじゃないかと期待する、

そしてそれを本当に願う男が振り向きざま、そう言いながら彼女を見た。

彼女はあんた馬鹿じゃないの？とでも言いたげにタメ息まじりに言った。

「私の病気が治つたところで月にはいけないでしょう？ ねえ？」

僕と同様にほぼ毎日見舞いに来ている彼女の親友に彼女が投げかける。

「だよね」彼女の親友も呆れ顔で同意している。

しかし、ここで死を待つ彼女が、そしてその死を受け入れなければならぬであろう僕が、どうすれば人類の大きな飛躍を歓迎できる

んだろうか？

未来がないのだ。

あえて言葉にすることはないが。

彼女は彼女の死、僕は彼女の死を毎日見ているのだ。
そんなことを知らないアームストロングには悪いが、能天気なヤツ
としか当時の僕の目には映らなかつた。

二人が付き合い始めたのは高校生の時だつた。
テニス部のキャプテンをつとめていた彼女は、はつらつとした日焼
け顔のまさしく少女らしい少女だつた。共に同じ大学へ進み、就職
を控えた大学4年の6月に、彼女の病氣は発症した。
正式に婚約をしていたわけではないが、共に両親とも仲良く、そ
なることが当たり前のように二人の全てが動いていたし、そこに何
の障害もないはずだつた。

二人の全ては一人で一つの人生になると確信していた。

治しようのない病氣はいつの時代にもあるものだ。
しかしそれは、それに直面しない者にとっては月面着陸と同様に、
テレビや新聞のものでしかない。

彼女は死を覚悟しなければならない病氣を受け入れられず毎晩泣き
はらし、僕と彼女の両親も、僕も目の当たりにした現実を受け入れ
ることが出来なかつた。僕たちには彼女の死を見つめる他に、もう
一つの覚悟をしなければならなかつた。万が一ではあるが、彼女の
いない世界で生きて行かなければならない現実を受け入れなければならない覚悟を、心の”片隅”に用意しなければならないのだ。

彼女が入院したからと言って外へ出ない日がなかつた。
僕の休みに合わせて彼女はシビアに体調を管理してたらしく、外
泊の許可を主治医に申し出た。

そりや病氣だからいつも彼女の思い通りに行くわけではなかつたが、

よほどの事がないかぎり土・日は実家へ戻り、月曜日から金曜日まで入院生活をする、というサイクルだった。

彼女が外泊の許可をもらうと必ずドライブへ出かけた。

彼女はとにかく遠くへ行きたがった。

それも毎回ちがうルートで行こうと毎回僕に懇願した。

その時の彼女の瞳は、死にたくないと訴えかけるような気迫がこもつていた。僕はそれをさりげなく了解した。

彼女が喜ぶからだ。

どんなに遠くへ行って疲れていても、海岸線のパーキングへ停車して車中から水平線に浮かぶ夕日を眺め、僕らは会話した。今までの人生をたどるようによく、これから的人生があるようによく、思い出と未来をすべて現実のモノにしようとするように語り合った。

しかしこいつだつて特別で楽しいはずのドライブが、彼女の一言が発端で大喧嘩したことがあった。

もう少しでいつも海岸線のパーキングだった。

「来週はどこへ行こうか？」

口を開いたのは僕からだつた。

「この世の全てを見るまで死ねないわ

「死ぬとか言うなよ。死ないよ」

死という言葉を彼女が発した時点で僕はキレていた。

言い方が悪かった。が、それが良かつたのかもしれない、彼女が止め処なくホントウの本当の本心を語つてくれたからだ。

「本当にそう思う？ 入院してたつて治療と言つ治療もないのよ？ 每朝・毎晩体温を測つてそれを記録され、主治医は体調を問診するだけで、定時の点滴だつてただのビタミン剤！ 治しようのない病気を抱え、いつ死ぬかもわからないって告知され、生きていく勇気がわく人なんているの？ 教えてよ。ねえ、教えてよ。私は1年後のあなたが何をしているのか、知らないのかもしないのよ。」

彼女はもともと喧嘩やいい争いが嫌いな性格のせいか、うつむき、声を荒げるのがやつとのようだつた。僕は彼女の本心に応えなければならなかつた。

ここで慰めたり、落ち着かせるのは僕の愛し方ではなかつたからだ。僕は自分を主張し、彼女も自分を主張し、二人の未来を一つに作つていくのだ。それが彼女が死のうが死ぬまいが一人と言う単位を一つにする術だと思つた。

「そうだ、君は死ぬかもしれない。生き続けていくのもしれない。僕は行き続ける方に賭けなければならないし、万が一、万が一君が死んだらその事実を受け入れられずに生きていかなければならないだろう。君は僕で僕は君なのに、そのどちらかがいなくなつてしまふことを今、ここに君も僕もいるのに、考えられるわけないじゃないか」

僕は彼女の前で不覚にも涙を流してしまつた。
手立てのない現代医学と、無力な自分に悔しさがこみ上げたのだ。
弱音は吐いちゃいけない。

彼女が生きているのに、その病魔に僕らは負けてはいけないからだ。きっとその内、そんな事もあつたよねつて、将来としをとつたしわくちゃの君が、じいさんになつた僕の横で笑つてなければならなかつた。

アポロが月面着陸してから3ヶ月経つていた。

彼女の外出許可が減り、病魔は確実に彼女をむしばんでいつた。

彼女と僕が付き合い始めたあの頃の日焼けした面影はなくなり、彼女は白くやせ細つていつた。

あの大喧嘩以来、彼女は普通に戻つた、、「と言つより更に強くなつていつた。外出をねだる僕に、「病室と思うから特別なのよ。だってここが今のが暮らしていくところなのよ?」と僕がたしなめられる始末だ。僕は相変わらず彼女以外想うものはない、が唯一、彼

女の親友と隠し事をした。

彼女の親友はすでに全てを用意していた。

「11月、雪が降る前にあなたたちの結婚式をしよう。」「…」

考へてもいなかつた。

病気が治つたら結婚しよう。

それが僕と彼女の将来への願懸けだつたからだ。

戸惑う僕に、彼女の親友は「友達が主催なんだからいいじゃん！あの娘が退院したら本当の結婚式よ。式場も押さえてあるからパジャマでも何でもいいから連れてきて！」

そう言い放ち、僕が何かを答える間もなく去つていった。

秘密の結婚式を知らないのは彼女だけだつた。

彼女の母から聞いていたのは、最近僕が見舞いに来る直前に、自分で起き上がることができないと黙つて、起こしてもらつていたことだつた。毎日会つてもわかるほど、少しづつ、少しづつ換えたてのシーツに同化するように彼女は白く透けていくように見えた。それとは反比例して彼女の瞳は、凜として輝きを増していく。笑顔と冗談のたえない病室からは、いつも笑い声がもれていた。自分に未来はあるのだと、訪れる毎日に応えようと彼女は生きていた。

金曜日の夜、僕と僕の両親、彼女の両親総出で主治医に外出許可をもらいて言つた。うなづくしかない主治医を尻目に僕は足早に彼女の病室へ向かい得意げにドアを勢いよく開け、笑つた。

彼女はいきなり笑いかける僕を理解できぬ間に病院から式場へさらわれてしまった。

控え室でドレスに着替えさせられた車椅子の新婦とそれを押す新郎、

テーブルは円形に組まれ、一人の祭壇は式場ど真ん中のバリアフリーの360度見渡せる彼女特製の祭壇だった。祭壇の周りで彼女の知る面々が拍手で迎え入れていて。何が起こっているのか理解できない彼女の左手の薬指に僕が指輪をはめようとしたところで彼女は何が起きているのかを理解できたらしい。

彼女は泣いていた。

ぼろぼろと、、「…」という言い方しか出来ないほど涙を流したが、それは彼女のうれし涙ではなかつた。

「帰して、病院に帰してよ。嫌だよ。私の知らないところどころか」と、「…」

僕の袖を引っ張つて彼女はたじろいでいた。

「何で？みんなが、しかも君の親友が企画してくれたんだよ？楽しもうよ？みんな祝つてくれてるんだから」

「楽しくなんかないよ。楽しくなんかないよ、、「…」まるで私が死ぬ前に結婚したいみたいじゃない！こんな私のたちの結婚式じゃない！」一人の結婚式は病気が治つてからよ。」

大きな声だった。怒ったのだ。

結婚式は将来のある二人のためにあるものだ。

それを悟つていながら僕は、彼女の親友に担がれたことを一瞬後悔した。その瞬間、この披露宴を主催した彼女の親友が祭壇に上がり彼女に言った。

「よかつた、、「…」私はあなたがあきらめてるんじゃないかと思つて心配してたのよ。彼が病室に来る前にベッドから起き上がる事が出来ないことを、彼に隠してたでしょ？ベッドからあなたを起こしてくれるのはお母さんじゃなくて彼なのよ？その意味がわかる？本当にたらあなたたち今頃結婚してたよね。たまたま、あなたが病気でこの時期に結婚式できないから祝つてあげたかったの、親切の押し売りだけど、、「…」

隠しごとへの後ろめたさから、彼女の親友は困惑していたがさらに続けた。

「あなたたちの結婚式には出席させてもらひながら、私たちからの結婚式を受け取つてくれる？」

彼女の親友も泣きながらホンキで怒つていた、僕に体調の悪さを隠す姿に弱気な一面を見たのだろう、それよりも彼女の容姿を変えていく病魔に対してもうか？多分、どちらにもだろう。

場違いだが、なんて大がかりな説得の仕方だ、と思った。が、それが親友からの大きなエールだった。彼女はうなずいて、すぐにいつもの笑顔を取り戻り、披露宴は無事終えた。

あくる月、つまり12月、彼女はこの世からいなくなつてしまつた。涙も声も、自分の存在すらもなくなるほど泣いた。

彼女はもうこの世にはいない。

いくら頭ではわかっていても、胸に手をあてるたび君しかいない。

初七日を終え、慰問客が去つた仏壇に線香をあげた。

不意に彼女の母が僕の横へ正座して丁寧に手紙を差し出した。

「これ、これ、」

「なに？」

「あの子、みんなに手紙を残していたの、友人や私たち、あなたの両親にも、これ、」

渡された封筒には何か大切なものが詰まつていそうで、その日はうまく手紙を開けられなかつた。

次の日、彼女の手紙を助手席へ乗せ、ドライブへ出かけた。

いつものように帰りしな、海岸線のパーキングに停車したまま彼女と話をしていた。

もちろん実在しない彼女との対話はないが、彼女がとなりにいるような気がしたまま夕日を眺めていただけだった。

彼女はもうこの世にはいない。

沖を飛ぶカモメは所在ない僕の心のようになつただけだ。

一人が共有した時間や場所はたくさんあつたが、ここで手紙を読むことにした。

封筒の中には2枚の写真と一枚の便箋が入っていた。

例の披露宴の集合写真と、今いるこのパーキングで彼女が撮影した夕日に映る僕の横顔だった。

～ありがとう～

ありがとう、あなたに会えて良かつた。

ありがとう、それが全てです。

ありがとう、どうか悲しまないでください。

ありがとう、空に帰る時がきただけのような気がします。

不思議と怖くありません。

ありがとう、たくさんドライブへ連れて行ってくれて。

あなたを想うとき、いつもこの写真の横顔が浮かびます。

いつも、いつも違う景色の中、あなたの横顔を見ながらドライブしあけれど、あの海岸線のパーキングで見るあなたの横顔が一番好きでした。

ありがとう、私に未来をくれて、ありがとう、～。

彼女はどんな想いでこの手紙を書いたのだろう？

涙でヨレヨレになつた手紙を清書しなかつたのは、それが出来ないほど気持ちを始めたからだらう。大切なヨレヨレの手紙を、さらに

僕の涙でコレコレにしてしまった。

家へ帰るとTVでは相変わらずアポロ11号の月面着陸の報道が流れていた。

「もう見飽きたな」と、となりで親父がお茶を濁していた。

もしも、もう一度 彼女に会えるなら、彼女が月にいたって駆けつけられるだろう。アームストロングの言う”偉大な人類の飛躍的な一步”はどうでもよかつた。

もう一度君に会うための一歩を踏み出せる場所があるなら、月だって僕一人のチカラで行ける気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6402c/>

カモメ

2010年12月8日08時54分発行